

あまりはっきりした関係は得られなかった。

## 8. あとがき

浜田における風の予報のためにおこなった調査の一部でその概略を簡単に述べた。不連続線や高気圧によるものについては調査の残った部分があり特に高気圧につい

ては原因の解明されない点が相当にある。低気圧や台風についても個々につき十分調査する必要がある。

この調査は浜田測候所在任中に実施したもので、同所の曾我恒夫技官の協力に対し、ここに深く感謝の意を表する次第である。

## 【新書紹介】

気象庁山の気象研究会編：山の気象と遭難

A 5判 213頁 朋文堂発行 定価 400円

山の遭難の原因は、冬ならば「なだれ」凍死、吹雪、夏ならば転落などと、いろいろ数え上げられますが、これらの原因の半分位は気象に関係があると云われます。もとより、吹雪に出会ったとしても万善の準備を持ち、適応した処置を取ったグループは遭難しないでしょうから、一概に原因を気象だけに帰することはできませんが、気象の影響は確かに大きいでしょう。

一口に気象知識と申しますが、山の気象は非常に複雑です。地形がこみ入ってれば、風の吹き方もその場所場所で異なり、天気変化も違ってきます。しかし、複雑なら複雑のように、そこに法則性がありましょう。山の遭難例をしらべ、山の気象を説明して、難を少なくしようとするために書かれたのが本書であります。

「山の気象研究会」というのは、気象庁の登山家たちの研究会の名ですが、この本を書いたのは、この研究会ではなく気象庁の予報官の有志が作ったグループで、詳しくは、気象庁予報官室山の気象研究会とすべきものです。事実そういう名で出発したのが、手違いか、もしくは何かの間違いで、予報官室という文字が抜けてしまったものようです。今後は別の混同しないような名前が出されるものと思います。

予報を出している人から見ると、山の遭難がある度に直接、間接に、責任を感じます。そして説明の足りなさを感じます。毎日の予報作業では、山に行く人の為に特別長い予報文や解説文を書くことは許されてはいませんから、これは是非ないことです。そこで予報者側から山の気象の説明書が出たことは大いに意味のあることです。

しかし、よく云えば複雑な山の気のことですから、山に精通し、登山者も混えて、このような本が書かれたならば、もっとよい本が出来たのではないかとも思われます。また、ラジオ天気図の中で、地名順が北からになっていますが、現在は南から放送されています。これは、この順序変更が、丁度出版途上で行われたために、こうなってしまったのですが、読者は、不思議に思うかも知

れません。

気象災害研究会編：日本の台風災害

B 6判 258頁 東洋経済新報社発行 定価 360円

表題のとおり台風による災害について論じたものです。災害という言葉は、内容のむづかしいもので、烈しい台風が海上を通過しても、そこに船舶がなければ、大きな災害はないが、反対に比較的弱い台風でも都市の上を通れば、大なり小なりの多くの種類の被害を出します。つまり台風災害というものを論ずる時は、自然現象の方だけに注目しても結論は出ませんで、社会条件の方かなりの考慮を払わなければなりません。極端な場合を考えて、個人的に考えた時、被害以上に災害補助ないしは、便宜が与えられた場合は、これは災害というかどうか、などということも云われるわけです。

台風についての気象学的な説明書は、今までにもありますし、災害だけについての本も出て居ります。しかし両方の面つまり自然現象の方と社会条件の方から論じて、この本のように詳細なものはこれまでになかったのではないかと思います。

気象災害研究会は小人数からなるグループですが、昭和28年から日本気象学会の研究グループの一つとして活動して居り、毎週1回の討論を欠かさないという精勤者ぞろいの集まりです。

内容は台風の生態、台風災害の歴史から、台風を捕える気象技術、台風災害のあれこれ、災害をなくすために、の5章および序章、付録、からなります。

この本に書かれているように、災害をなくそう、とする努力は、少なくとも2,000年前にもすでに講じられています。災害防止運動は早くから叫ばれているのに、なぜ、毎年いや毎月のように、災害は新聞のよいネタになっているのでしょうか。別の見方からすれば、どんなに努力しても災害はなくなるものかも知れません。しかし、みじめな災害を現に見た人々は、災害のなくなることを切に願うにちがひありません。この切な願いが、この書物を書かせているのではないかと思います。

(有住直介)